二〇〇七年度　大谷学会研究発表会　発表要旨

日本人初の入蔵者・寺本婉雅に関する新出資料について

三宅伸一郎

寺本婉雅（一八七二～一九四〇）は、能海寛（一八六八～一九〇一？）とともに、一八九九年、カム地方（いわゆる東チベット）のリタン（Li thang）バタン（'Ba' thang）に足を踏み入れた事により、日本人初の「入蔵者」と呼ばれている。同じ日本人初の入蔵者でありながら、二人に対する扱いは対照的である。能海の生家・浄蓮寺（島根県浜田市金城町波佐）には、彼が書き残した数多くの記録、日記類が保存されており（それらは『能海寛著作集』として、うしお書店から影印出版されている）、また、彼の業績に学びこれを顕彰する「能海寛研究会」も、一九九五年から機関誌『石峰』を発行するなど、活発な活動をおこなっている。

一方、寺本については、弟子の横地祥原がまとめた『蔵蒙旅日記』（芙蓉書房、一九七四年）を除き、まとまった記録がなく、十分な研究がなされていない。資料の不足が寺本に対する扱いを小さくしている。というより、等閑視されていたに等しいであろう。彼自身、生前「私の故郷は尾州海東郡（今の海部郡）犬井村で、恰もベニスの如き水郷であります」（『求道と女性』城端仏教求道会、一九二九年、二二五頁）と書き残しているにもかかわらず、『大谷学報』に掲載された没後の追悼記事の中に「明治五年三月二十一日　滋賀県蒲生郡鐘山に生る」（「故寺本婉雅教授略歴」『大谷学報』二二一一、一九四一年、九七頁）と誤って記されていることは、彼に対する扱いの低さを端的に示しているといえよう。

昨年（二〇〇六）八月、富山県南砺市の城端別院で、木場明志教授を中心とするグループが「佛厳寺・寺本婉雅」との墨書のある「義和団兵服」を発見したことがきっかけとなり、城端・宗林寺と滋賀県竜王町・村岡家

に、多数の関係資料が所蔵されていることがわかった。まず、宗林寺所蔵の資料について述べよう。

宗林寺の先々代住職・桂香厳（一九一七年、真宗大学卒業。一九七八年、八十四歳にて逝去）の次男・昌雄を寺本は養子としており、その関係からか、彼はここを拠点に活動していた「城端仏教求道会」、後の「黙働会」の指導的役割を果たしていた。桂香厳の娘・恵子さんの話によると、寺本の没後、チベット語文献をはじめとする遺品はいったん黙働会に預けられた。その後、曽我量深が学長であった時（一九六一～一九六七）に大谷大学に寄贈したものの「不要」として送り返されたものが、現在宗林寺に所蔵されている資料であるという。チベット語文献、パーリ語文献の他、直筆資料などがある。

チベット語文献のうち注目すべきは、「*Legs sbyar sgra mdo ka la pa i / legs bshad rab gsal snang ba yod*（梵語声明経カラーパの善説「明瞭な現れ」）」との表題を持つ第一葉目・第二葉目のみのウメー書体による未完全写本である。これは、その表題や内容、書体からみて、奥書に「*Legs par sbyar ba i sgra i bstan bcos ka la pa i grel pa mthong ba tsam gyis legs pa go ba legs sbyar rab gsal snang ba*（梵語声明論カラーパの註釈、見ただけで良く理解できるもの「明瞭な現れ」）」との題名が記されている大谷大学図書館所蔵チベット蔵外文献No. 13983の欠部冒頭二葉に相当するものであることに間違いない。何らかの形で泣き別れになったのであろう。

パーリ語文献一点は、シンハラ文字で書かれた貝葉写本であり、末尾の記述からそのタイトルは、Satipaṭṭhāna と称すべきものであると推測されるが、書写年代もあわせて、今後の子細な調査を要する。「光緒二七年（＝一九〇一）正月初二日慶親王送与大日本国特派全権従軍布教使寺本婉雅」との表書きのあるもので、来歴のしっかりした貴重なものである。

直筆資料としては、『十万白龍』（帝国出版協会、一九〇六年）の原稿の他、*Klu 'bum dkar po*、*Klu bum nag po*、*Klu 'bum dkar nag khra gsum* などのボン教経典、チベット語訳『阿弥陀経』、護摩儀軌に関するテキストや『倶舎論頌』を筆写し翻訳のノートとしたものがある。

次に、村岡家所蔵について。村岡家は寺本の姪の子孫

である。村岡家所蔵の資料は、履歴書、寺本宛の多数の書簡、陸軍からの任命書（明治三四年）、京都帝室博物館からの資料受領書、ダライ・ラマ一三世からのチベット旅行許可証、キリスト教関係チベット語文献、研究ノート、写真など多岐にわたるが、最も注目すべきは、薄緑色の表紙に「第貳號」と記され、「新舊年月事記」の内題を持ち、「擲地金聲　打箭炉協茂源自造」の赤色罫罫紙に新暦と旧暦を併記し、墨書された日記である（以下本日記）。明治三二年（一八九九）九月一日から明治三三年（一九〇〇）九月二日までの一年間（実際の最終記事は七月二七日まで）、すなわち、東チベット・バタンから帰国し、北京に再渡航するまでの記録である。『蔵蒙旅日記』のこの間の記述は不十分であり、本日記は、その穴を埋める重要な資料である。

本日記から浮かび上がる事柄を二点指摘しておきたい。まずは、重慶における三ヶ月余（一八九九年一一月二九日～一九〇〇年三月八日）の間の寺本の行動についてである。『能海寛遺稿』（能海寛追憶会、一九一七年）に、能海から重慶の寺本にあてた手紙が二点収録されていることから、二人の間でやりとりが交わされていたと考えられる。果して本日記には、能海と寺本の間の都合十四度にわたる手紙と電報のやりとりが記されている。寺本から能海へは、本山や布教局局長・谷了然からの手紙の転送もおこなわれている。ここでは寺本の置かれた立場を示す最後の記録を抜き書きしておこう。「二月二四日：午後五時五十五分本国ヨリ歸朝セヨトノ電報ト又打箭炉能海君ヨリ金子速ク送ラン事ヲ頼ムトノ電報同時ニ来ル」。以上のことから、重慶滞在中、寺本は、本山と能海との間の連絡役を果たしていたと考えられる。

次に、帰国後の行動について見てみよう。帰国直後の四月一六日、能海寛から託されたチベット語文献を南条文雄に渡しているが、それ以外の時間の多くは、再入蔵のための活動に費やされている。石川舜台より海軍軍令部・小笠原長生への紹介状を渡され、五月二九日上京。小笠原を通じ陸軍・福島安正、外務省政務局長・内田康哉らに知遇を得て、再度入蔵のための相談をたびたびおこなっている。その間に、義和団事件が発生し、「七月二七日：奥村五百子女子ニ面会し北清事件ニ付テ渡清ノ

交渉ヲナス」、「七月二七日：清国変乱（義和團）事件ニ就テ石川舜台氏ニ面会ス」との記事を以て、本日記は終了している。

極めて粗略な紹介となったが、最後に今後の課題を述べておこう。まず、資料の全体像を示すための目録作成が必須である。この貴重な日記の翻刻作業と公開が必要である。そうした一連の研究作業は、チベット学はもちろん、専門の枠を超えた、総合的な視点でなされるべきである。

（貴重な資料の閲覧・研究を許可していただいた資料の所蔵者・宗林寺および村岡家（村岡利一氏）に感謝いたします。宗林寺所蔵資料の存在については木場明志教授にご教示いただいた。加藤基樹氏より撮影資料の提供を受けた。上林直子氏には村岡家との連絡をとっていただいた。宗林寺所蔵パーリ語文献については全面的に清水洋平よりの教示を仰いだ。記して感謝いたします。）

（本学専任講師　チベット学）

〈キーワード〉チベット、近代日本仏教史、海外布教

〔編集委員会付記〕

三宅伸一郎本学講師の他の発表者及び発表題目は次のとおりである。

能『山姥』と『十牛図』考　　モニカ・ベーテ本学教授

末法到来と空の象徴化：響堂山石窟に刻まれた阿弥陀浄土図と『文殊般若』の相互関係　　井上尚実本学専任講師

福祉の地域化と民生委員活動の課題　　山下憲昭本学教授

以上の発表内容は『大谷学報』第八十八巻第一号に要旨または論文として掲載予定である。